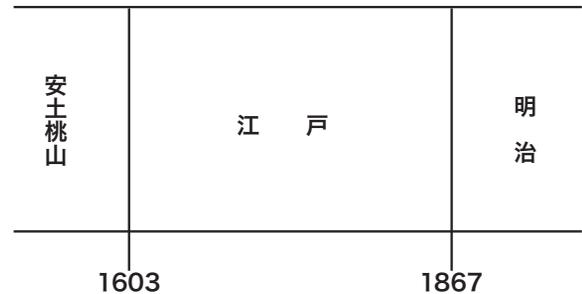


11. 江戸時代

関が原の合戦後の1603年、徳川家康は江戸に幕府を開きました。

以後、約260年間は徳川氏によって治められた時代です。この時代を江戸時代といいます。



(2) 参勤交代・街道と大里宿

① 小倉藩主らの参勤

参勤交替の始まりは、「2代将軍・秀忠のご気嫌伺い」という形で、諸大名が江戸城を訪れることをくり返したことによります。秀忠はこれを利用して、元和8（1622）年に外様大名に、その妻子を江戸に住ませることを命じました。

次いで寛永11（1634）年、3代家光は譜代大名にも同じことを命じました。

「武家諸法度」に、次のように記されています。

一、大名小名、在と江戸との交替を相定むる所なり。毎歳夏四月に参勤致すべし。

- 意味→大名（石高1万石以上の領主）と小名（石高1万石未満の領主）は、国許（藩）と江戸とを交替すること。毎年4月（今の4～6月）に参勤すること。

九州の大名たちは、参勤交替には関門海峡を渡らなければなりません。

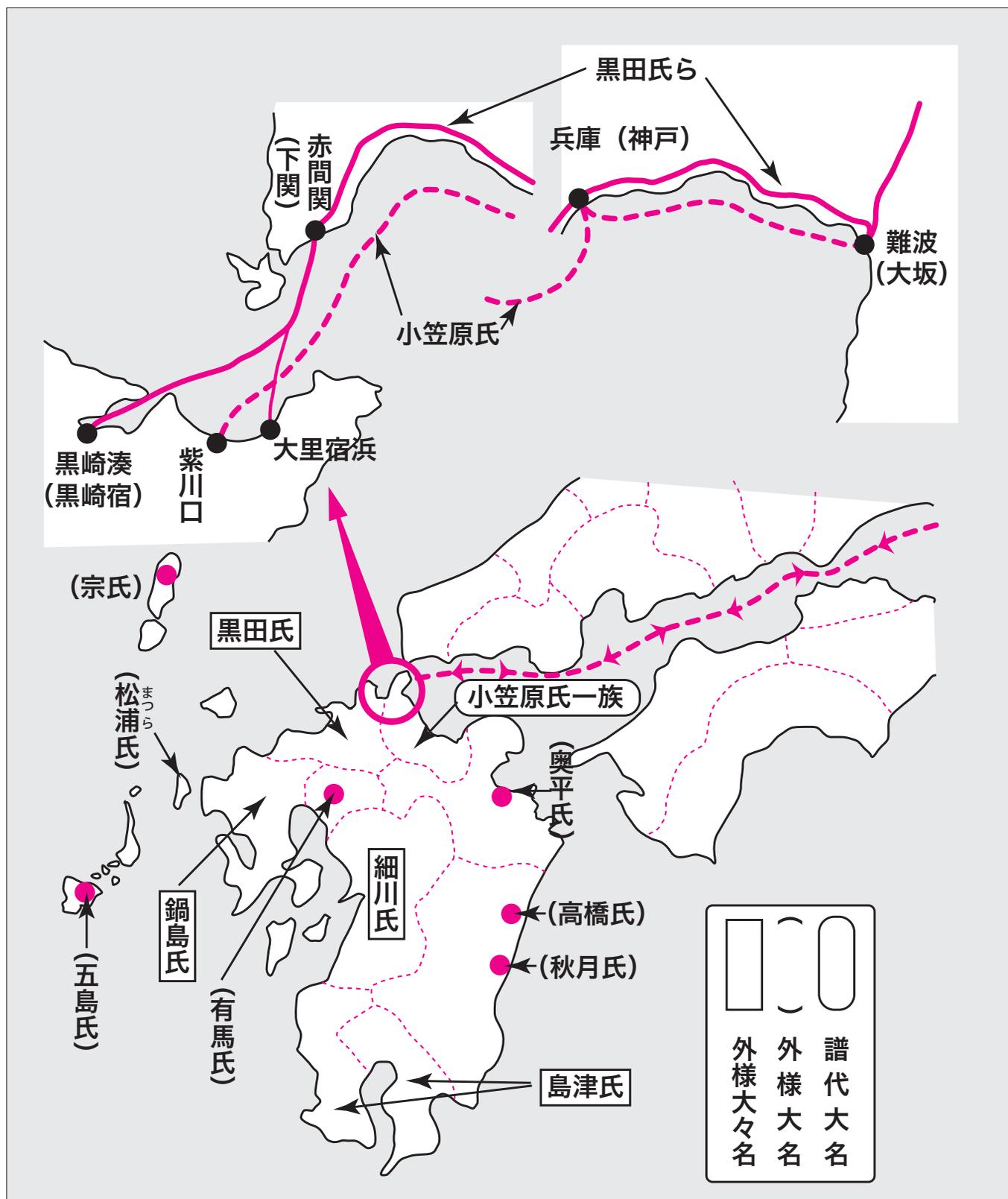
もちろん船を利用するわけですが、譜代大名と外様大名とでは違いがありました。

譜代大名の小倉藩主小笠原氏は、小倉城下の紫川口と兵庫（神戸）、紫川口と難波（大坂）の間を自前の船で航行できました。

しかし、黒田氏や鍋島氏などの外様大名が、船で行けるのは、黒崎と赤間関、または、大里と赤間関との間だけでした。



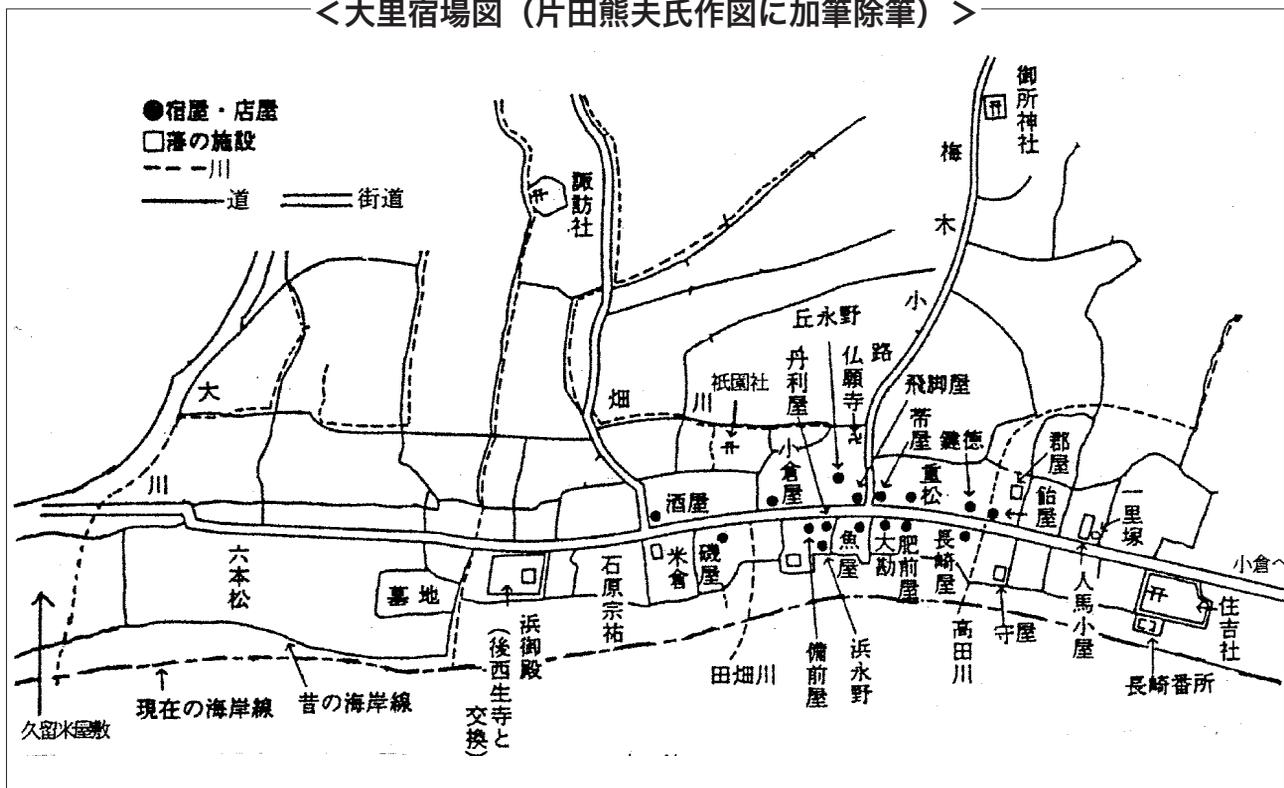
譜代大名（小笠原氏）と外様大名（黒田氏ら）の参勤交替時の渡海の違い



② 大里宿場の様子

内裏村（大里村）は、だれの手によってどのように整備され、栄えていたのでしょうか。
小笠原忠真は、内裏村の一角に地図に示すような宿場の町割りをしました。

＜大里宿場図（片田熊夫氏作図に加筆除筆）＞



宿場には大名が宿泊する宿（本陣。お茶屋ともいう）のほかに、一般の旅人や参勤の供侍たちが泊まる宿屋が建ちました。そして、雑貨屋・魚屋・米屋・酒屋・飯屋などの店もありました。

大里宿場が大名たちの参勤で賑うようになると、筑後久留米藩の有馬氏は、宿場の東の地を小笠原氏から借りて、藩屋敷を46軒も建て、24艘の船を常備しました。

寛政11(1799)年には、大里宿場の西の端に、幕府が長崎奉行所の出張所を造りました。

したがって、この年から、長崎街道は「長崎—小倉城下」から「長崎—大里宿場」となりました。大里の長崎番所について、「浄国寺公年譜」に、右の文が見えます。



寛政十一年、豊前国大里と住吉社との間に、公儀より番所を取建てて有り、

●意味→寛政11年、豊前国大里と住吉神社の間に幕府が番所を建てた。

③ 大里宿場の人々と九州の諸大名

大里宿場を利用した九州の諸大名の参勤交代の様子はどうだったのでしょうか。

今の小倉北区長浜にあった門司口門から大里宿場に通じる浜辺の様子は、

「企救の高浜 根上松よ 豊前街道で これ名所」

と、唄われました。

「根上松」とは、松の根をおおっていた砂と土が長い年月にわたって風波で吹き飛ばされたり、洗い流されたりして、根が深いところまで出ている松のことです。

また、根上松の海岸を大名行列して行く様子は、次のように唄われました。

「企救の高浜 根上がり松よ 馬もお籠も ゆるりとな

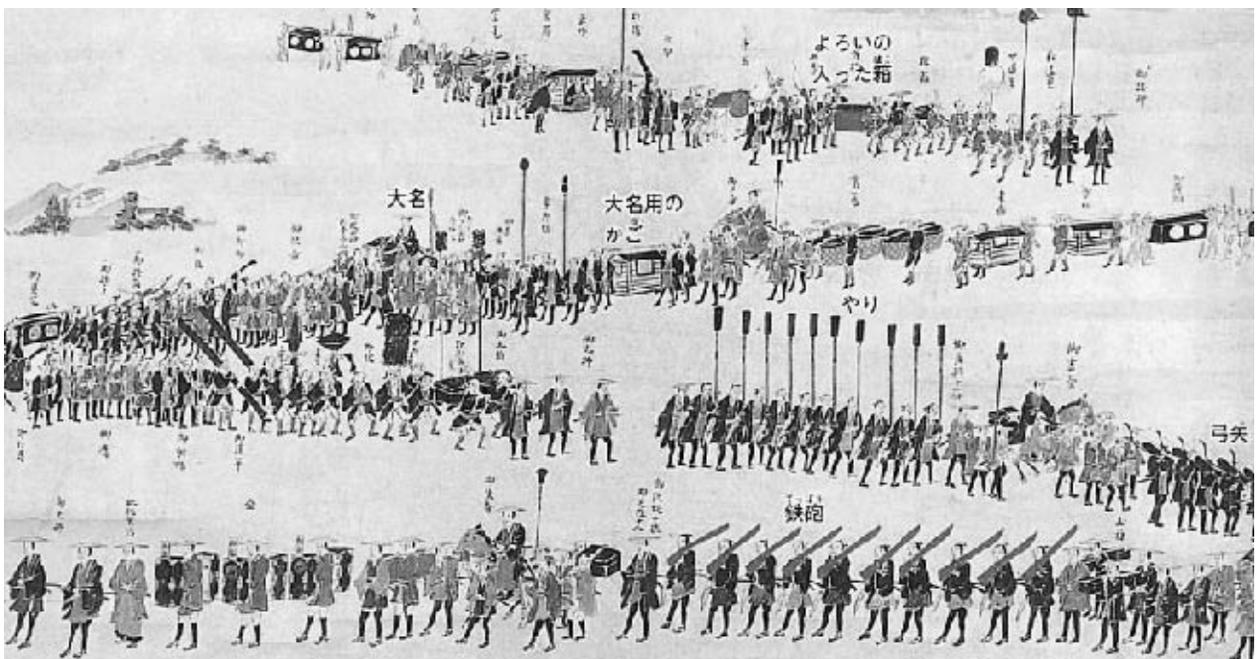
海辺眺めて ゆるりとな 毛槍そろえて 街道を」

藩主は籠に乗っている。

その前後と左右を、馬に乗った武士と徒歩の武士がそれを囲んでいる。先頭は、毛槍を高く掲げた中間が進む。後方には、荷を背負った馬を導く人足や荷を担いで運ぶ人足が続いている。

関門海峡の波が寄せては返す松の浜辺を、一行はゆるりゆるりと進んで行く。

そのような様子が目に浮かびませんか？



会津藩松平家参勤交代のようす (文溪堂 6年 社会科資料集)

この大名行列の一行を、今か今かと待ちわびていた人々が、大里宿場の町衆まちしゅうでした。

大名一行が宿場に入る前々日か前日に、「〇〇藩△△様、□□刻ごろご到着の予定」と、宿場役人の知らせが来ます。知らせが入ると、宿場の町衆は、老若男女そうで総出で宿場の内外の道・溝・路地を掃除します。そして、路上が犬や猫の糞ふんで汚よごされないように気を配りながら、一行の到着を期待して待つのでした。

なぜ、大名一行の到着を期待して待ったのでしょうか。

それは、お供の武士や中間・人足たちが宿場の店で買い物をしたり、酒屋や飯屋めしやで飲食をしたりして、お金を使ってくれることを期待していたからでした。

しかし、どの大名一行も、お金を使ってくれるとは限りませんでした。肥前佐賀藩の鍋島氏おおと大隈・薩摩すみ さつ まの鹿児島藩の島津氏は、九州を代表する大々名でしたが、大里宿場の町衆には人気がありませんでした。

「いやなお客は 鍋島薩摩 いつも夜泊まり セツ立」

- 意味→鍋島と薩摩の大名行列は、いつも夜遅く宿場に入って来て、翌朝は四時には出発して去ってしまう。「素泊まり」「素通り」するだけなので、売り上げにつながらない。

と、嘆なげいた唄です。



宿場の面影おもかげを今も伝える民家と、今の様子

(2) 亨保の大飢饉と猿喰新田の開発

○ 亨保の大飢饉

18世紀前半の亨保17(1732)年の秋のことです。この年は未曾有の大凶作で、企救郡は、前年に続いての2年連続の凶作でした。その原因は、日照不足とイナゴの異常な発生でした。

門司区旧門司の寺の記録「真光寺史」は、次のように伝えています。

<亨保十六年>

この年凶作なり。豊前地方はしか、犬煩事多し。人に喰付き死す者多し。

- 大意→この年、凶作。豊前国では麻疹と狂犬病が流行している。狂犬にかみつかれて、狂犬病で死ぬ者が多い。

<亨保十七年>

五月六日 雨降り続くこと五十日

五月六日 大洪水

五月十日 大洪水

閏五月十二日 大洪水

六月二十一日 大雷鳴、世界暗となる

七月 虫害多し ※イナゴの害



真光寺

この結果、企救郡では、3～4人に一人の割合で、7622人(うち、町人は2481人)もの死者がでました。

この7622人も死者が、すべて餓死者というわけではありませんが、真光寺の過去帳(死者を記録した帳簿)には、死者の数が次のように示されています。

亨保十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年
九人	九人	八人	十四人	三十七人	五人

これを見ますと、真光寺のある旧門司での死者数が、17、18年に突出しているのが分かります。大飢饉が直接の原因となっていることは、まちがいないでしょう。

大飢饉によって飢餓地獄に陥った藩士と藩民を救うために、参勤交代で江戸に滞在中の藩主の忠基に、小倉城につめていた重臣らは、急ぎの連絡をしました。そして、許しを得ると、小倉城内の米蔵を開いて、たくわえていた米や麦の一部と、その他の食料を藩の人々に放出しました。

しかし、それは、藩士とその家族の救済を第一としたもので、城下町に住む町人や農村部で暮らす農民にはほとんどゆきわたらず、飢餓をやわらげることはできませんでした。

次に、藩は幕府から、12000両もの借金をして、それで米の買い付けをしようとしたのですが、何しろ西日本全域にわたっての大凶作・大飢饉でしたから、十分な米の買い付けはできませんでした。

○ 宗祐と猿喰新田の開発

大里宿場町を含む大里村の庄屋をしていた人が、石原 宗祐でした。享保の大飢饉は、宗祐が23歳（数え年）の時、大里村から126名もの餓死者が出ました。

この時の地獄の体験は、後に、新田の開発につながっていくのでした。

宗祐が、父の後を継いで庄屋職についたのが、元文3（1738）年で、28歳の時でした。

宝暦7（1757）年、48歳で庄屋職を息子に譲つ

た宗祐は、その年の11月に、弟の賢達（賢達も門司村の庄屋で、甚作ともいう）の協力を得て、猿喰湾の干拓に着手しました。

工事は、約400mの湾の口を仕切る堤防造りから始められました。

近くの村から集めた人夫（働き手）の汗と力で、堤防造りは順調に進むかに見えましたが、あと100mのところ、工事が行きづまりました。海底にはヘドロが大量にたまって、岩石をいくら投げ入れても、地盤が固まらなかったのです。



晩年の宗祐像



「こりゃあ、なんぼ岩石を投げ入れても無駄じゃ」

人夫たちは、あきらめの思いが先立ち、働く意欲が失われていきました。

「皆の衆よ、わたしに妙案がある。あきらめては、なりませんぞ」

このように人夫たちを説く宗祐に対して、甚作も

「皆の衆の言う通りと思う。ここは、あきらめがかんじんかも」

と、工事の中止を勧めましたが、宗祐は、

「甚作よ、いかにこの海の底深いとて、限りはあるものぞ。わしは一步も退かぬぞ」

と、決意のほどを示したのです。

宗祐は、この時、すでに土台固めのために、小舟を岩石ごと沈めるという方法を考えていたのでしょう。

宗祐は、その日と翌日の両日に、下関・大積・白野江・田野浦・喜多久・今津・井の浦・柄杓田などに住む漁師を訪ね、古い小舟を十数隻買い入れました。

「皆の衆、小舟にうんと岩石を運び込むのじゃ。そして、舟ごと沈めるのじゃ。

土台は間違いなく固まる」

宝暦8(1758)年11月、猿喰湾は堤防によって外海の周防灘から切り離されました。

次に、湾内に残された大量の海水を湾外に出す作業にとりかかりました。

翌年、約33町2反(約33ヘクタール)の新地に生まれかわると新地を田畑に使えるように、土地の改良にとりかかりました。新地に含まれている塩分を取り去ることと、農業用水の確保が必要でした。



汐ぬき穴、4つのうち写真の2つが現存

猿喰の地には本村川が流れていましたが、宗祐たちが開いた新地には、その川の水を利用する権利がありませんでした。それで、宗祐たちは、折谷、八ヶ坪、鳥越、両国免の溜め池造りに取りかかりました。

それは、宝暦^{ほうれき}9(1759)年から明和^{めいわ}5(1768)年までかかる工事で、その間も新地に含まれている塩分を湾外に出す作業を同時に続けました。

新地が田[●]になると、宗祐は近くの村から次男、三男の数十名に耕作させました。

その際、宗祐は、家・農具^{たねもみ}・種^{のうこ}など、暮らし^{のうこ}に困らないように準備をしてあげたということです。



現在の折谷池（奥の建物が門司北高、その間に新田が広がる）
おりたに



裸島と巖島神社の鳥居



現在の猿喰新田の様子

また、安永^{あんえい}2(1773)年には、耕作する人々の安全と豊作を願って、裸島^{はだかしま}に巖島^{いつくしま}神社を建てました。

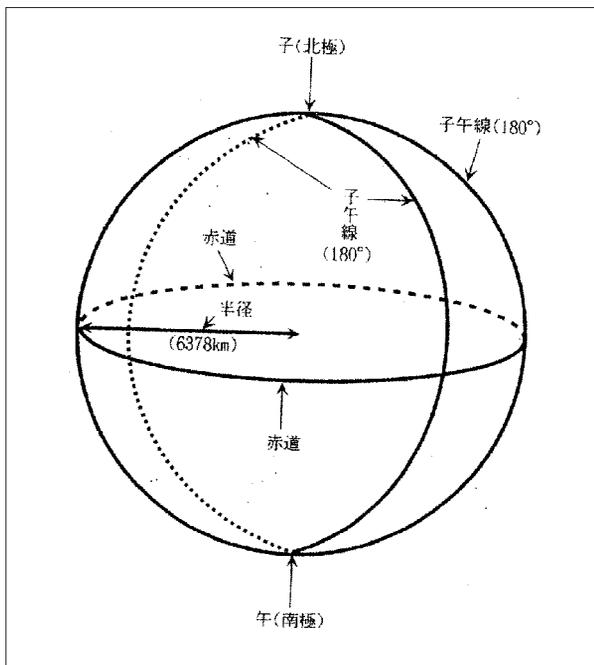
1757年から約16年間という長い年月をかけて、新田から米^{しゅう}が収穫^{かく}できるようになりました。

その時の宗祐や村人は、どのような気持ちで、巖島神社にその新米^{きさ}を奉げたことでしょうか。また、宗祐や人夫たち、農民たちは、どのような気持ちで現在の新田を見ているのでしょうか。

(3) 伊能忠敬の門司測量



忠敬の画像



地球の大きさと部分名称

伊能忠敬は、延享 2 (1745) 年に、上総国山武郡小関村 (千葉県九十九里町) に生まれました。

17 歳の時に、下総国佐原村 (千葉県佐原市) の名主 (庄屋) の伊能家の養子になりました。

伊能家には、算術・測量・天文の蔵書が数多くありましたので、測量術や数学、暦学の基礎を独学で身に付けることができました。

寛政 6 (1794) 年、50 歳の時、家督を長男の景敬に譲ると、翌年、江戸の深川黒江町 (東京都江東区深川) に移りました。そして、天文学と数学の研究に没頭し、幕府天文方の高橋至時の弟子となりました。

寛政 12 (1800) 年、幕府は、至時に蝦夷地 (北海道) の測量と地図作成を命じました。

この時、至時は忠敬を推薦しましたので、幕府は、それを忠敬に命じました。忠敬が、56 歳の時でした。

忠敬は、その年の 6 月に蝦夷地に行き、翌年 12 月に江戸に戻ってくると、正確な地図を幕府に提出しました。

忠敬は、蝦夷地の測量中に天体観測を欠かしませんでした。そして、子午線 1 度を 28 里 2 分 (110.8 km) と算出しました。これは、現在の精密観測機器で測量した値の 111 km とほぼ同じです。

忠敬とその助手たちの一行が北九州の地に入ったのは、文化6（1809）年12月27日で、測量にかかったのは、翌年1月12日でした。

豊前国企救郡から九州本島と周辺の島々の測量が始まりました。この日の忠敬の日記を見ましよう。

朝、小雨。見合^{みあ}わす。四^よッ頃、雨^{あめ}止^とむ。夫^{おつと}より、小倉城下船頭町出立。手分けの我等^{われら}下河^{しもかわ}辺^べ、青木、箱田、平助、同所^{どうしょ}の宝町秋月街道三辻より初^{はじ}む。…（中略）…文字口門外^{はな}の海^{うみ}辺^べを測^{はか}る。…（中略）…長^{なが}浜^{はま}浦^{うら}、富^{とみ}野^の村^{むら}、山^{やま}越^こ町^{まち}、赤^{あか}坂^{さか}村^{むら}、新^{あたら}町^{まち}村^{むら}、原^{はら}町^{まち}村^{むら}を歴^へて、大^{おほ}里^{さと}村^{むら}駅^{えき}迄^{まで}測^{はか}る（文字口門外より一^り里^り十^{じゅう}一^{いち}丁^{てい}五^ご十^{じゅう}間^{かん}一^{いち}尺^{しゃく}寸^{すん}）。前^{まへ}の海^{うみ}辺^べ共^{とも}合^あわ^わせ^せて、一^{いち}里^り二^に十^{じゅう}一^{いち}町^{まち}四^し十^{じゅう}三^{さん}間^{かん}二^に尺^{しゃく}七^{しち}寸^{すん}（小倉より大里^{おほさと}辺^べ駅^{えき}道^{みち}一^{いち}里^り半^{はん}）。止^と宿^{しゆく}本^{ほん}陣^{じん}重^{しむ}松^{まつ}彦^{ひこ}之^の丞^{じやう}に^にし^しゃ^ゃく^くす。家^か作^{さく}よ^よし。…（中略）…午^ご後^ご、微^こ雨^{さめ}。暮^くれ^れよ^より^り雨^{あめ}。不^は測^{からず}。

- 大意→小倉城下の宝町から測量を開始。文字（門司）口から長浜から大里村宿場まで測る。ここで、家の作り（家作）がよい本陣の重松宅に宿をとった。

※「里・町・間・尺・寸」は、古代からわが国で使われていた長さの単位（尺貫法）です。1里は36町で、約4 km。1間は6尺で約1.8 m。1尺は10寸で、約30 cm。



本陣<お茶屋>跡

翌日は小森江→白木崎→門司村（中食※昼食のこと）→網屋浜→田野浦までを測量して、田野浦で宿泊。

14日は、太刀浦→部崎→白野江→大積→喜多久→柄杓田まで。光照寺で宿泊。

15日は、柄杓田→伊川村→軽子嶋→猿喰村→今津村（中食）→乗船→恒見村→津村嶋一周→恒見村。光円寺で宿泊。

16日は、恒見村から下曾根まで測りつつ、周防灘に沿って南下しながら、測量を続行。その後、日向国（宮崎県）まで下りました。

9年1月に小倉城下に戻ると、27日からは、小倉城下から企救郡の西部の

測量に入り、西隣の筑前国遠賀郡の八幡・戸畑・若松地区を測量しました。

忠敬と弟子たちの測量は、「伊能図（正式名は、大日本沿海與地図。別名は大日本沿海実測全図）」として、忠敬の死後の文政4（1821）年に、幕府天文方の景保（高橋至時の子）と忠敬の弟子たちの手で完成しました。

(4) 部埼灯台



部 埼 灯 台

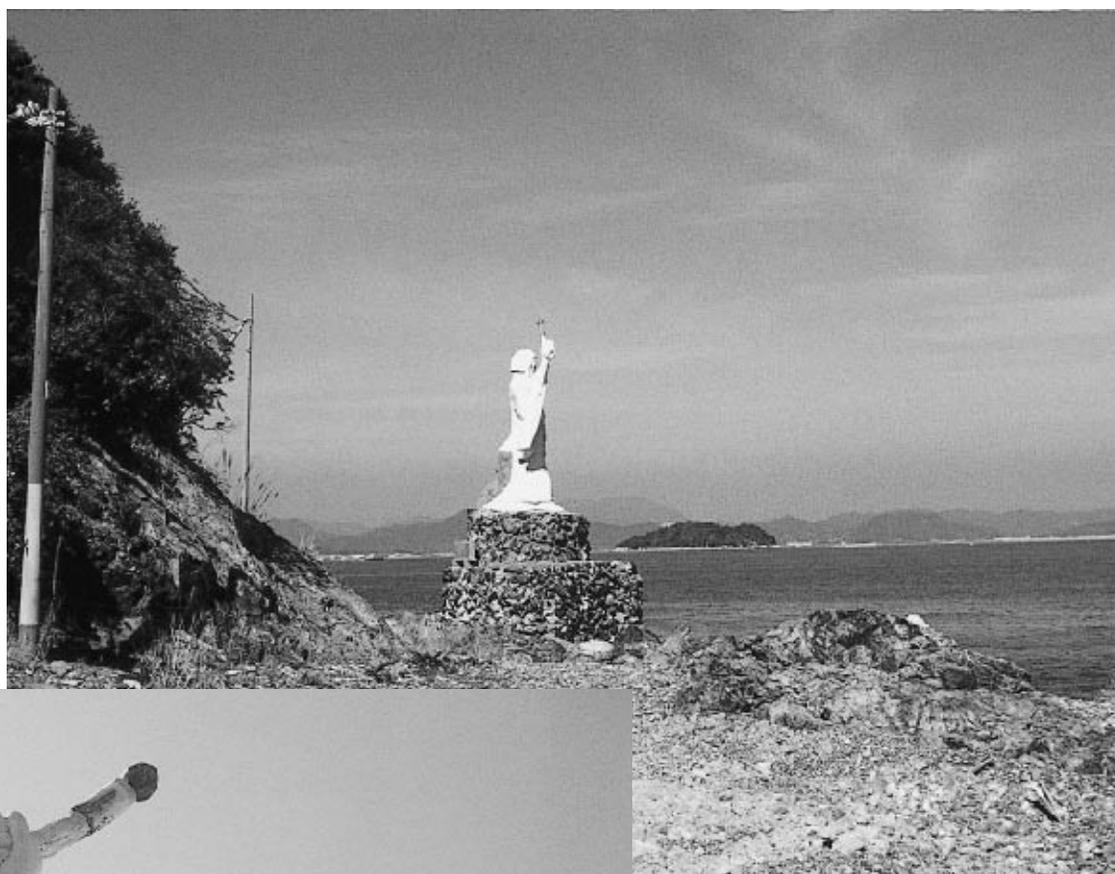
J R 門司港駅から青浜行きの西鉄バスで約30分。終点の青浜から、徒歩で約10分の所にあります。天保7（1837）年のことです。青浜海岸の小高い丘の上に、一人の僧が小さな庵を造って住みつきました。

僧は、夜ごと薪を燃やして、海峡を航行する船の安全を守る灯台がわりの役目を果たしていました。この僧が清虚です。

清虚は、昼は田野浦、柄杓田、大里までも、托鉢という修行をして回りました。

清虚は、1日に1食しか食事をとらず、托鉢して集めた米は薪にかえて、夜はそれを燃やして、船の航行を助ける明かりにしていたのでした。

はじめのうちは、得体の知れない坊さんと小馬鹿にしていた村人も、その熱心さに心を打たれて、白野江村の庄屋を通して、清虚への援助を小倉藩に願い出るようになりました。



清虚の像と周辺の様子

清虚は、^{かえい}嘉永3（1850）年、
74歳の^{てんじゆ まつと}天寿を全うするまでの
13年間、1日も火を絶やすこと
なく、たき火を続けました。

清虚の行いは、明治時代にな
ると、村人に受け継がれ、英国
式灯台に実を結びました。

今の灯台は、明治5（1872）
年に九州で3番めに建てられた
洋式灯台です。イギリス人の技
師と日本人の大工さんらによっ
て建設されました。



清虚の像

(5) 唐人墓



唐人墓

長州藩は、「異国船打ち払い」の幕府の命令に従い、関門の海に姿を現した外国の艦船に砲撃を続けました。

元治元(1864)年8月、イギリス、フランス、アメリカ、オランダの四カ国連合艦隊は、長州藩に対して報復に出ました。

この戦争は連合艦隊側の勝利で、長州藩は多数の死傷者を出したほか、沿岸の藩の砲台はすべて破壊されてしまいました。

和布刈公園に「唐人墓」と呼ばれる十字架が建っています

この唐人墓は、元治元(1864)年の長州藩と四カ国連合艦隊との戦いで戦死したフランス兵の慰霊碑です。

(6) 長州藩と豊前小倉藩の戦争

徳川14代将軍の家茂と大老職の井伊直弼の幕府政治下の武士社会では、2つの主張が対立していました。

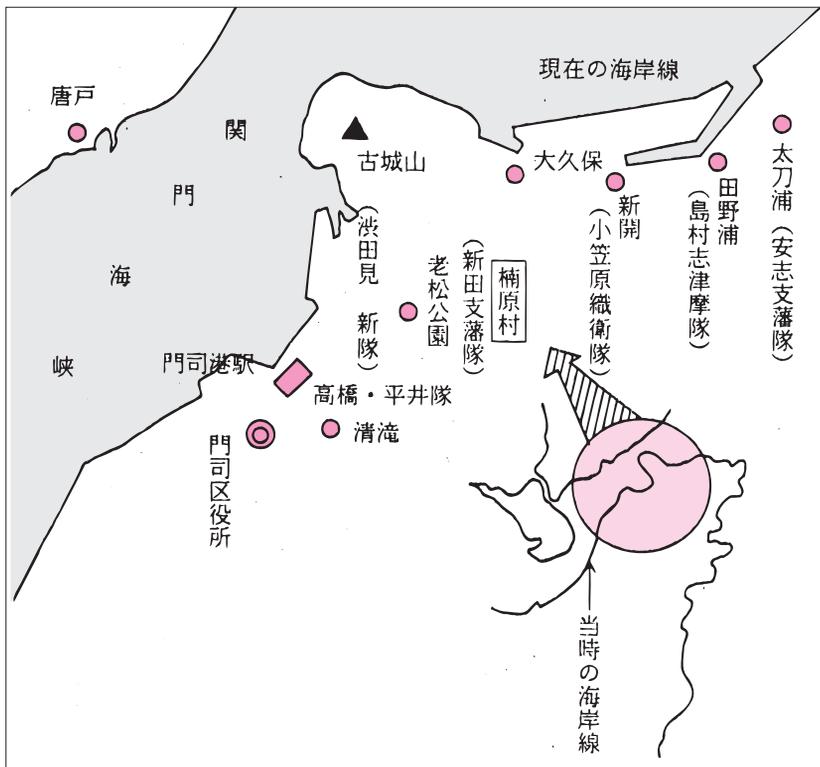
幕府の政治(幕政)の開国政策を支持する「佐幕派」と、従来の鎖国政策を望む「攘夷派」の対立でした。

豊前小倉藩は、譜代大名の小笠原氏でしたから、当然、開国派でした。

ところが、海峡向こうの長州藩は藩主が外様大名の毛利氏でしたから、当然のことながら攘夷派でした。

長州藩が、後に倒幕派に変身し、そのリーダーの藩となっていくと、幕府は、長州藩征討の幕令(第二次征長令)を西日本地方の諸大名を中心に発しました。

これにより、長州藩と小倉藩は戦うこととなりました。



小倉軍の門司配置図

○ 田野浦・楠原での戦闘

慶応2 (1866) 年6月17日の未明、長州軍は、田野浦を艦砲射撃して、兵を上陸させました。

出撃準備にとりかかろうとしていた小倉軍は、慌てふためいて大混乱となりました。

長州軍は最新式の鉄砲で武装していたので、応戦した小倉軍は歯が立たず、死傷者が増えるばかりでした。

浮足立った小倉軍は総くずれとなって、楠原方面、清滝方面、更には大里へと敗走して行きました。

長州と小倉の初日の戦闘で、小倉軍は長州軍の約3倍の兵力を持ちながら、惨敗してしまいました。

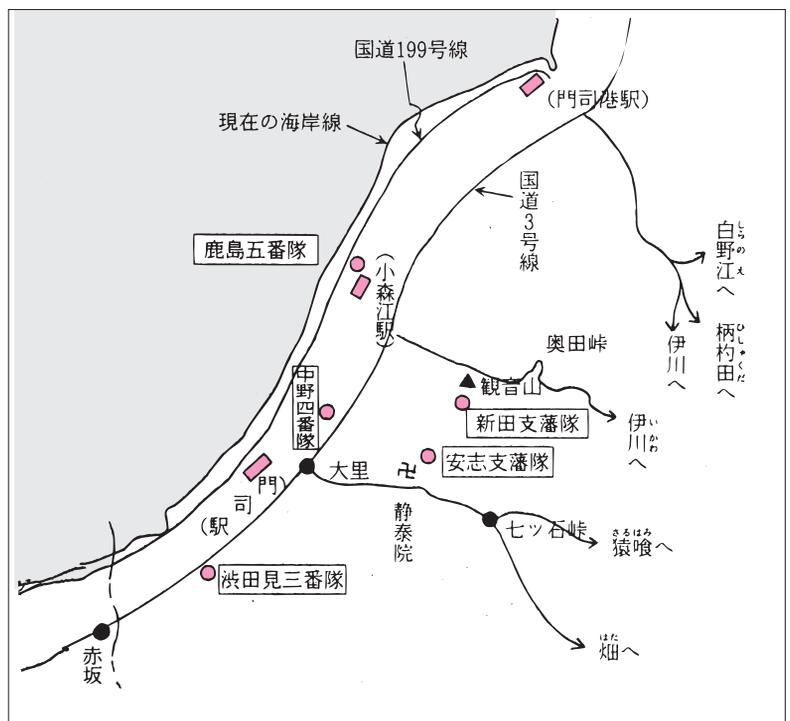
長州軍は、田野浦の小倉軍陣地を破壊した後、下関に引き揚げました。

○ 大里での戦闘

田野浦・楠原戦闘の後、しばらくは小康状態が続き、7月3日に長州軍約8百が大里に上陸すると、2度目の戦いが始まりました。

小倉軍は、長州軍の次の攻撃は大里だと想定した陣をしいていました。長州軍はその裏をかいて兵を2隊に分け、一隊は小倉軍の正面から、他の一隊は背面から攻める作戦を立てました。

また、長州軍は、観音山から静泰院の一带に布陣中の新田・安志の小倉支藩軍に、海峡から艦砲射撃をして、小倉軍を混乱させました。



小倉軍の門司配置図

小倉軍は、馬寄・赤坂方面へと敗走しました。

2度めの戦いにも勝利した長州軍でしたが、兵数で劣っていたため、小倉軍の夜襲を警戒して、その日の夕方、下関へと引き揚げました。

○ 馬寄・赤坂での戦闘

7月27日、長州軍約8百は、白木崎の浜（西鉄バス停「風師」を海峡側に下って国道199号線に出た所）に上陸しました。

これに合わせて、長州軍の軍艦も、馬寄村の小倉軍に艦砲射撃を加えました。

砲撃にさらされた小倉軍でしたが、熊本藩細川軍が支援して戦列に加わると、その勢いも士気も高まりました。

一度は八丁越、赤坂へと後退した小倉軍でしたが、長州軍の数倍の兵力に加え、細川軍のアームストロング砲が威力を発揮して、この戦闘で初めて勝利しました。

翌28日、長州軍は新たな兵を投入して巻き返しに出ました。

長州軍の勢いはものすごく、小倉軍は敗れ、赤坂村・延命寺村一帯は長州軍のものとなりました。

その後、長州藩と小倉藩の戦いの舞台は、小倉へと移っていききました。



静泰院跡



赤坂合戦の石碑